蛇ヶ池
金松堂板
上之巻

A533
1

紅葉ふ模様 錦の織枝 初編 上の巻

五の夏

<48-8336>

二ッ為翁の小説ハ人の命ぞ機關に能似たりと呼ふ實放が称ひ文を学者ハよくいふ可ア車を飛たし一盃々々ます一盃ハ三々九度の真似ゆゑかく路ハ書籍も人手に渡り出生て侯の木阿弥陀地蔵の顔もさんげにハ傳ハりし結果ハ債主の鬼に引出れ閻王の目前にて身代限ハ是皆紙より誘引にあらずや心の駒と機關の手綱捌のあしきに有ふめかさ進てぞ爰に錦織駒吉ハ己名駒の鞭より債に衣外面の菩薩似ハ秋母にあらぬと婦人に縁ある陀ケ池の三人脚を躍せしと斯りものかきぬ松栄堂が目的神ひ遠ひ看客の相も旋り好ハ等顧書ハ表紙の枝折戸明ると直に杜志深傘張て頭ふくとめる

明治十四年六月　楳郷道人　川上渙邉

同雇女 志満
一籠
東橋連

松林の娘 小竹
百弦
松林丈
看客連
島田某実ハ 錦織駒吉

今をさる事三十余年その頃芝須の侠気と推量まる勇を好めども理よ嗜く知をさつとめとも奸多き目前の脳を弱くして始路の糟をまもる於▲

▲その中にも賢不肖あり いづれも大らさ○

○ちたろうをろう南しき

右
權

(つぎ)おそよし呼て年も三十路に越つるが容皃の他に勝うつくしきそが上に朝な夕なの粧に派出を飾ぞ年さへも四ツ五ツも若くも見へ殊におち川竹の流を汲し者なれぞ包とせぬ心の愛ゆゑに主従のさかひ杖を隔つ溺

又重役に媚び諂ひ同役を見下不正の権を好る○六どたり を恐れ 壱人方 つく 悲むべし 云

若者ハ道ならぬ恋に迷ひ主有者と知りながら露の情のあまりのしめ叶ぬ恋に心をくだく愚者の身のうゑぞ中に毎夜紡く素る囲碁仇ま諸嫁種牟と悍者なる性質嫉奸邪智のさがなし又

若者 奥様を能するに出入をの若者を撃して縮緒をむさぼるす一種の悪業の三ヶ一飲酒淫す よふけまでも悪運の強きにかつ巧みなる儀富ます

次へ

益々淫欲を添し同役宮門が妻なる者に深く心をうつしおくとも囲碁にこと寄せ足を近くし人なき折おちつけて言寄そのどかれども上役の用よき権平にて有ければおそれて心に恋まどもおき秘して逸て過きし言葉の中さしまぎれど思ひの中まして如何にもおへてされど種々と心をくぐと悪に

△佛系が黄金の家来へ急ぐ彼朝より来つる者人の浪人体

×逢笠被ひもとみなを紐をとく進む

又恐ろしけれ動てもおそよらぬ武日のをせ是守る障碍吉き伴ひて近も彼岸の花盛夫が留守を下婢子まのせへ

○うしろ殿あるまじ おそよる辻中と問まで おそよる驚きつ△

「捨つどありも問ありさん若う者若し中角玉○

一独言を見き だにおありつまと

つぎ 晃あるは其身が昔
界に有し折世話に成
たる客にて有ければ是を
くと双方が絶て
久しき對面に及びて
往來の人目も有れば
などゝ知るよしの案内
に橋詰なる川口
楼の奥二階仲居
が運ぶ酒肴男など
並べ上て下り

晃次郎まさむ
借財に果てゝ家
ゝ賣却に

呑て下に座
「如何にしく
此の吉野が廓
に有し頃も親も
かありに世を送り
しが三年此方
不如意の
體▽

又あし かくて
て為親始め
年餘りの書返ず つままで

次へ

つゞき 乳呑を残し此世を去りし困苦の上に困苦を重ね合ふ児を育てても成らば人を頼みて漸くに親知らず捨子にせしが其上我身の産婦の何歳ぞと思ふにつけ昔の諸業もつたなく夫に引別へ其身を今々

口を請けし私しも主人様をさぐり付渡らせ御恩報じを致すべき誓ひ何とせん今々

みいつもこのとらぬ全盛さ殊に見世の様まし容子見るに附きても其度と言ふにおもよらぬ酒息継「調子合入たる座敷の客弱儀私しも手段の五地に廃れても御恩とうてもあらば其恩

空まるまであり子追持たる中なりて思ふ其ままの世ぬ仏の苦き御推量下されましりと其私儀難儀を余所に見捨る仏にあらば何とう少しも御力にあるべき工夫を致します其身は迷惑

次へ

でき でも又鳴る八ッ鐘 まだ前座の客まで出して下されませ
男も涸を押へ「浮川様の勤をせし此家
は似合ぬ情ある言葉
実は恥入る身は玉ぞ
どふあまり今は大切
ある御身なれば
此を能々明日
お向まで様と
手紙をもて
下さるべし
左衛門

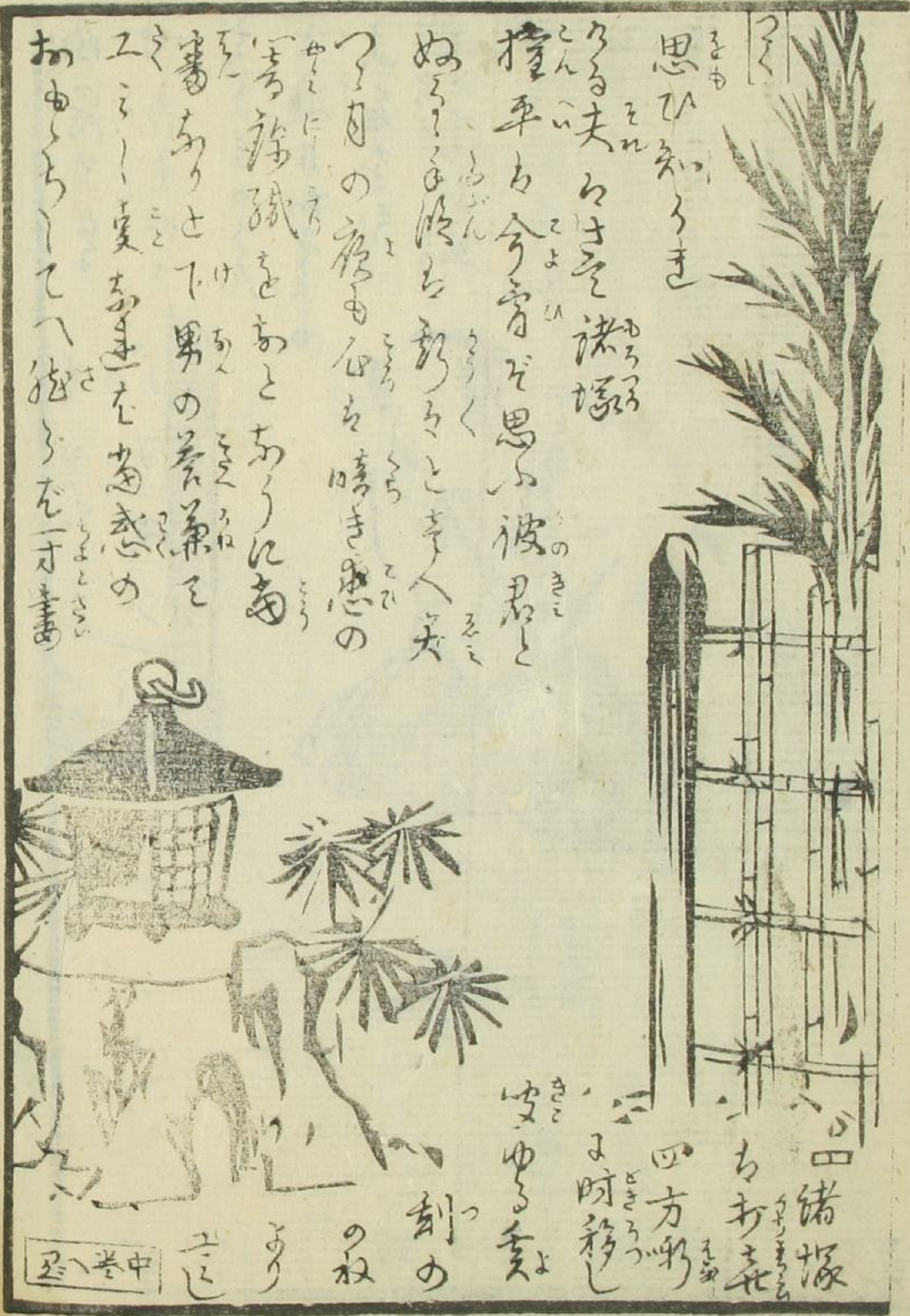
内景子五ッ時夜更ぬり
ちよまのくん
と進みおそよも
支度をなし
川口楼を立
出て旅を分
吉原家々へ
急ぎけり彼を
おそよは金を
包へ跡を流ひそこの人を 8

川口楼
へ沈せ
の覚そお
その清は
きれいの
手引の
と清まぞ

官許 朝鮮 名奏 牛肉丸

官許 たんせきの薬 天泰丸

全文 独一 書林 錦森閣



つゞく

思ひ知るべき なる夫はさて諸塚 撞平は今宵ぞ思ふ彼君と ぬれてしほ浪に郁ろさとさ人哉 つれ月の夜も心に晴き恋の 書詩識をあとおしれ高 書あつさ下男の言葉を 工こし変ある遂に迷惑の あやうくして へ 縦ぶた一寸書

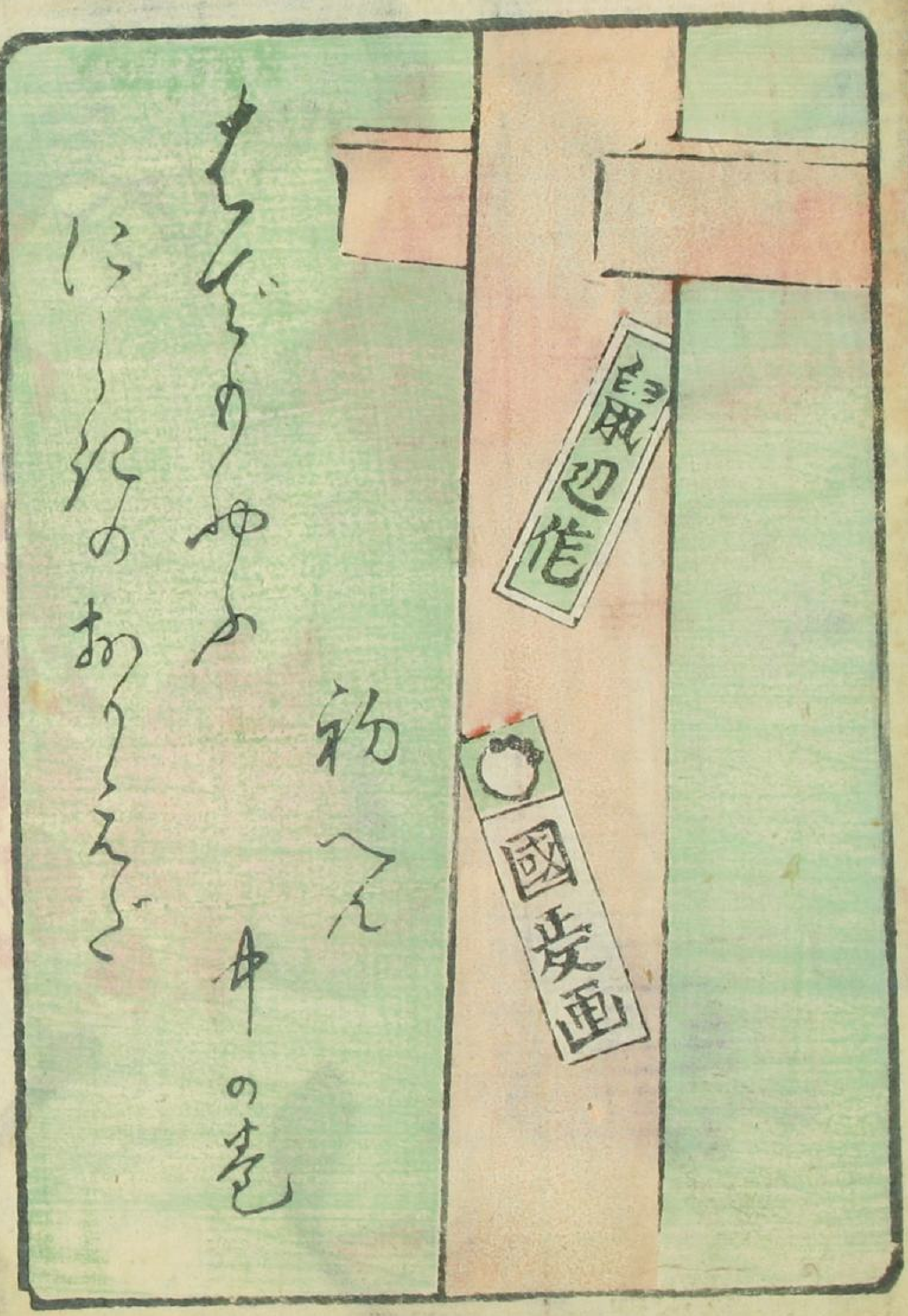
四口 緒塚 ちお花 四方彩 時移し 変ゆる秀よ 刻の 扱の

中之巻

つゞき 妻子を邪慾の為めにちらして夫の留守と言お悪しき思へ能らむ一寸妻君まだまうしたき返事をして酒宴せんと言つて奥へうち通

◎私だおもへよる△汁りあるれ詠塚ち喜四方山咄しに時移り一吹ゆる声へども、さはあくらぬ体に挨拶を安へ刺のくねてより工之捕のそことおそよの儀ますう▼

へ次 じゃ 旋 おき き つ に 実 ら ど 守



つゞき 此縮より集しが色の実ありしを店郷しやせし その上夫の當分で茶しのうち ぬ豊まあそ んあいそつるす おとッシト おきてまあまり しら旅しいたゞ餘り左様でも當様 まひとやまち は の大間時真嘘

▲との色あまり御内儀左様でござんせぬ

∴継母それと善くさしつぶして居るしかるつくぐ思ふ折

させぬ諸縁がある事を言の ∴

稲荷の森道り支度にまかせ川口様の御人連若い娘の勝手をつくしてびつくり ◐また藪やぬ悪がしかうの流しのその名の言ぬが 色の若色香 ◐ また藪やぬ悪がしか勝のそれが たとへば言 魚と水▲

うと様さし

÷男は金まで惠しる酒ありて ひとつ若も嘘 ∴

こゝろ またも夫まで お手わたし ÷

蒸妻の身は入れ替ゆ

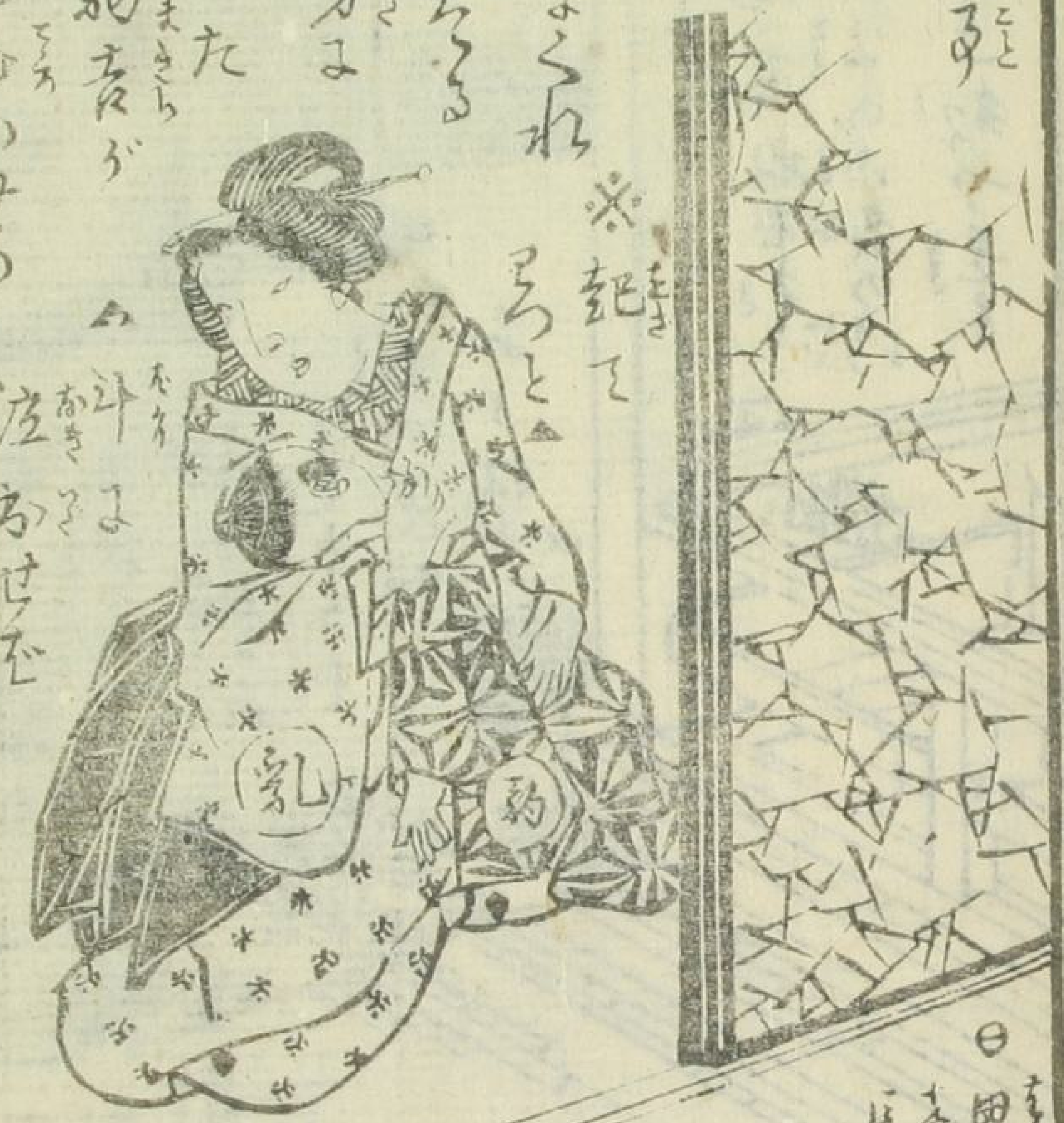
次へ

（つゞき）せんとこそ云は女子の道なるがぬいのかづら夫木重べき筈なるを事とし情なる神も佛も

※驚きさめて言ひ二言三言かつぐきを抱てあやまる譫語母の十九上着屋を見て悪いどう言い∴まく思ふ

ないかことうせ静に鳴る洞まくれ居たる時身は※起てふしたる駒吉が母のなのせつなまくさき虫がなくよ※

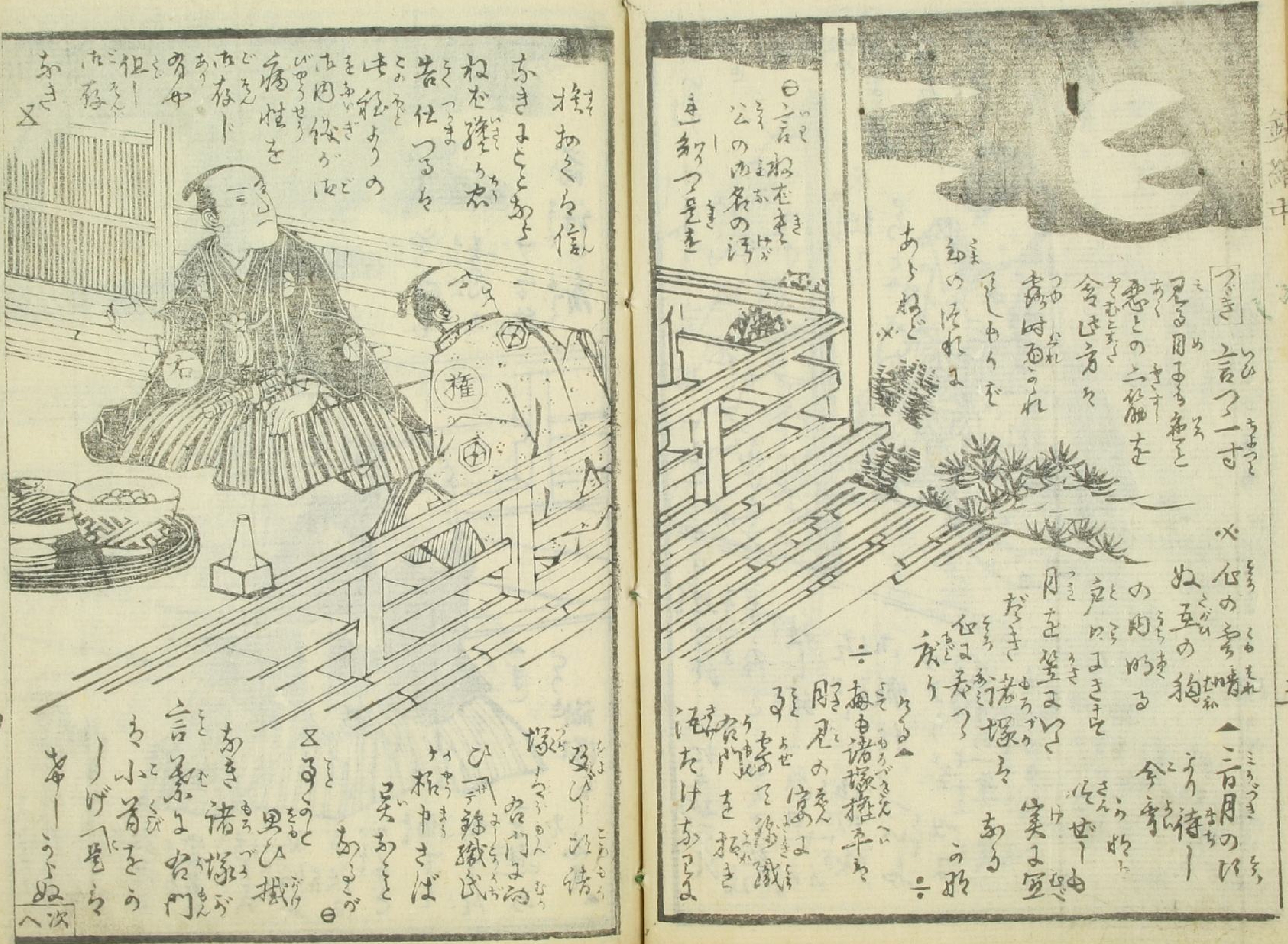
▲許は泣かせてあそようこれより勝手の方■



■居眠りなしたる下婢が※しかと

日思ひにおさへて長座を勢そまれ向殺し絆ひとつやく たドレ 蓮池なきまで仕へつひもつらりしが吐き只今の一条実が耳が夕刻入て日近まて有るの流通す珍しく侍中

次へ



つゞき

言つゝ一寸(ちよつと)

見る月よも惠を
悪との二筋を
含ぜ方を
露時雨これ
尽しあらぞ
勤の隔れは
あらねど〆

日言ねぶ右も
公の御名の汚
と置つて置き

心の雲晴 ▲三日月の光
ぬ互の胸 より待し
の内明る 今宵
戸口にまき寄て ふ作せし由
月を望まして 実に豈
おゝき諸塚を ある
心は悉つて この所 ÷
戻り

÷ さる▲
扨も諸塚推平を
賢君の家は
頭をあて錦織
宮門を招き
添たけあつては

様おくら信
あきらとある
ねぶ權ら右
告仕つるを
此節よりの
御肉後が故
病性を
ご存なし
有由
但し
ご存
あきく ✕

及びし此諸
塚も宮門は向
ひ錦織氏
相中さば
是あること
あるさが ⊖

✕ するのとを
思ひ擬
あき諸塚が
言葉に宮門
を小首をの
しげ「是ら
奉しうとぬ

次へ

※ある清月のさる稲家参詣の節

つき 病身にふし たてふし その作妻が 杜者が 家名の 汚るとん 江戸訳よ 世の中と 面てを 教て 主を進め 志を

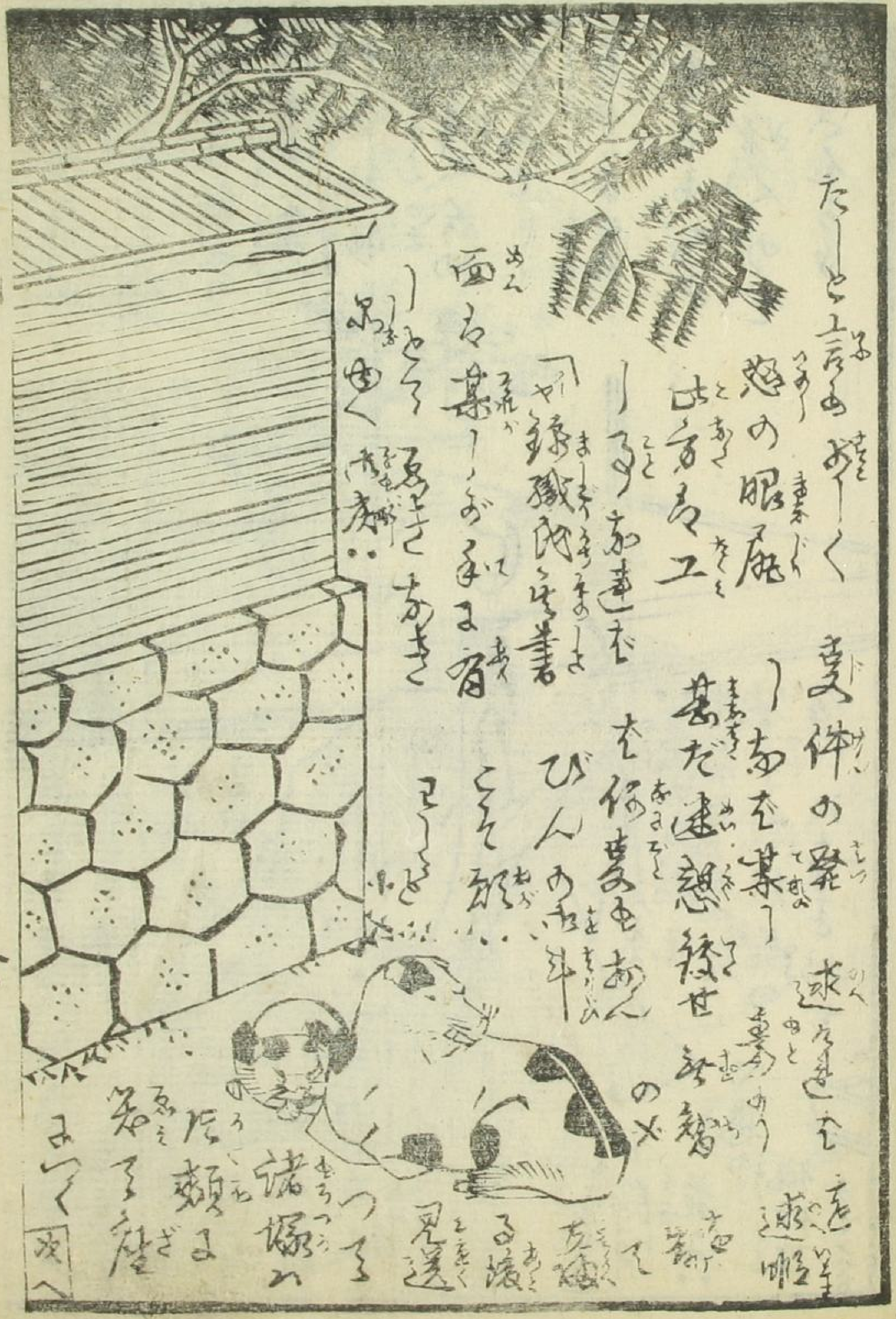
▲ましとう鬼塚を

▲川口 道郎相 抜きて多くの悪有 浪人とおしせ▲ ええよが縛し次第 のぶ金を与へし を手柄を真実 定て取交て 嘆きを吹て居 門をせき立 「ソハ首のさき 内告告なむ8

「サバトヨ ※ 証拠の品を 邪正をと 言を止めて 「是れこそ 証拠て あさき ることか どこの 中さ ● 兄の宛 よと懐中より

次へ

つゞき　壱通[illegible]◐
[illegible]
儀より[illegible]
渡て浪人へ
送[illegible]◐
一品が▼
[illegible]
[illegible]入た
[illegible]あか▼
それより吉門が
[illegible]
[illegible]て見てびつ
くり「面
目もあ
きれ妻が[illegible]来つ
[illegible]
[illegible]
[illegible]錦織
[illegible]再
再四[illegible]
小言[illegible]を飾つて
[illegible]


たしと言ふ[illegible]しく
[illegible]の[illegible]
[illegible]
しきり[illegible]
「ヤア錦織[illegible]書
面[illegible]
しきて[illegible]
[illegible]体の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
びんの[illegible]
[illegible]
[illegible]の〆
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
つて[illegible]
[illegible]
まつて
次へ

つゞき
扨猿押は立身する諸
塚が下役にて
服の家老へ
至迄仙帥
「扨主人今の
容子では
若手薬
責でもあるき
を嫁人のせ
まき候のく

ひおんなかてなもの
ある時は
労してゆかれ
きるは気まゝ
取主人へ趣向が
強きざまれ
と言に靖嫁
おいそひ一番
き容子を
かつぎたる故
先思召るも 六

つぎには喜助さん必ず考へせよ
此五の紅白浪に明日又咲ん
抑ゆる法葉ぞと立上り西
やましし一言話ど戸をたてさと
変て錠職台迷切て壊て
門から庭に飛越るをと書きへ△
椎の木へ妻の抑そ
よとさくし出然
の声をふるわせ
て「ヤイ抑そよ
我近勝が証
拠を見たかの

△織にゐる抑それ
涸だの親の
を正あを
于[illegible]
情なんと且
様[illegible]
いかし[illegible]
も
▲串せし
通りの恩の
音良人にて
恩を思ひし
郎に居し
[illegible]
咄申

ものごとつくまへと
言ぬけるの昔
界に有ても正しく
き者と思ひしが
は根引のおもひ子近
あわせしに似もなし
家内ままの世更さ
るこ家一生の語をまた
あり苦とて家名をも
泥をぬり悪べき事から
あれほどしぎに寄る
今ある人とく夫にて※

その時の悦にして
怪しとて金子
さぬが私
しめ
の膓
ぬ
責ぬる
ともきらを
しまう
ら串
さ
ね
たるよう
金子の内を
送りしが
ことば
兄へ

次へ

つゞき
なき不便 ▲つゞき思ひを●とも云
孫子に添 なきよりも一層死 私しが ▽
まるかまのしなるか●
作物是もまた 諸塚
が悪の叶ひ
なるその とてもつくても ⊕ 隙々駒吉
ぬ迷衣のうち ✕※
く隙なく法明さそ ▲
※一眼 見合せ
犯
▽ 命 顔是 ✕

✕ なき駒吉
のさぞ無憂
めを見せる
ぞあろ是 乙庵
をつらうが
黄泉のさき
なりいまゐの ⊕
倫廻
荒縄
引
歯を

次へ

つゞき
血の潤ご
落月影
浅茅の
鐘々
忽ち浪
風荒々
しき夫
の心鶴
が常
宝をつき
を一頭と
衰迷
ありそよみて
しやうきう
食切つけり
此世を去るゝ
実よいぢらしき
る事あり
さまで
此事流
布せし
より斯
そよは
金を
下巻へ次

紅葉摸様錦織枝 初編

一名蛇ヶ池三人切

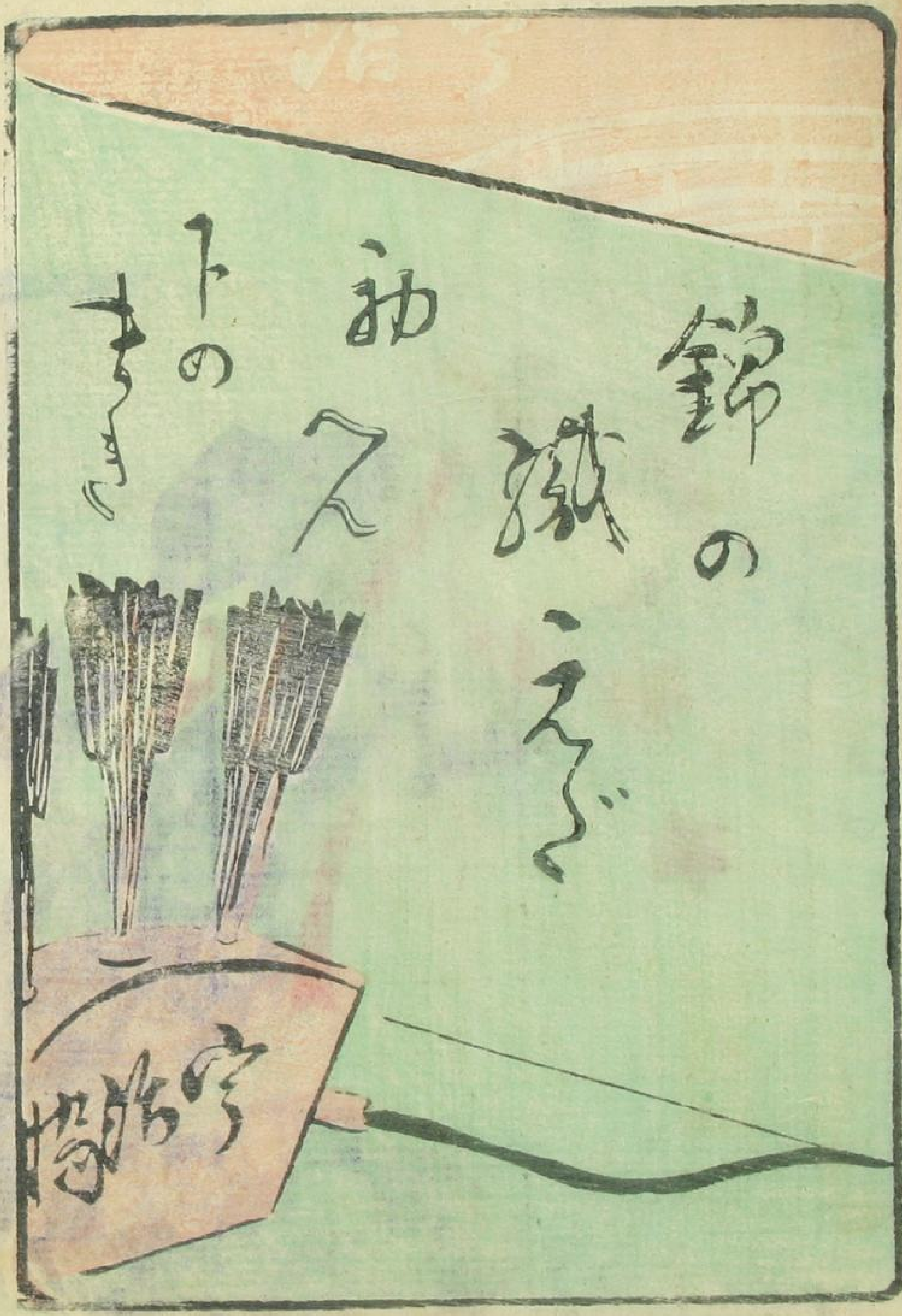
川上鼠辺著

梅堂國政画

よこぞしめ

恵まれし彼浪人より堀田家へ術へ状を出せしより推挙ごとき一大事と急ぎ錦織を始として諸家又筆の次第玉垂を明白になり呼よさせを法家訊られしよ玉垂天網不漏と切腹と

一さま々浪門と武士よあるべき不探偵のことありとても勝と成まへる記者日錦織 次へ



つゞき 宮川浪江の弟と成りし倅駒吉の性来に縁くの事しあまさでく志け連ぞ爰に記載是よりて卒年後の縁りとみなすまへうし○当流に

8 若樗打女房簾に見を飾たるその中に実語教と手揚弓場を連ねる方のおかめと云ふ小町と噂取年中○

○丁度その年が二九かぞへ十八といふ花盤おかみなるさいの店に蓮

いろや射矢のごとく月日に重る駒れ似て非る口ゐ家に二ちき花盛り大社にして明治六年霊験殊にの春とる著明く△あらぬ老若男女諸の群集る絶ゆる事なく茶や神明の神社□楊弓場も軒を並べ 8

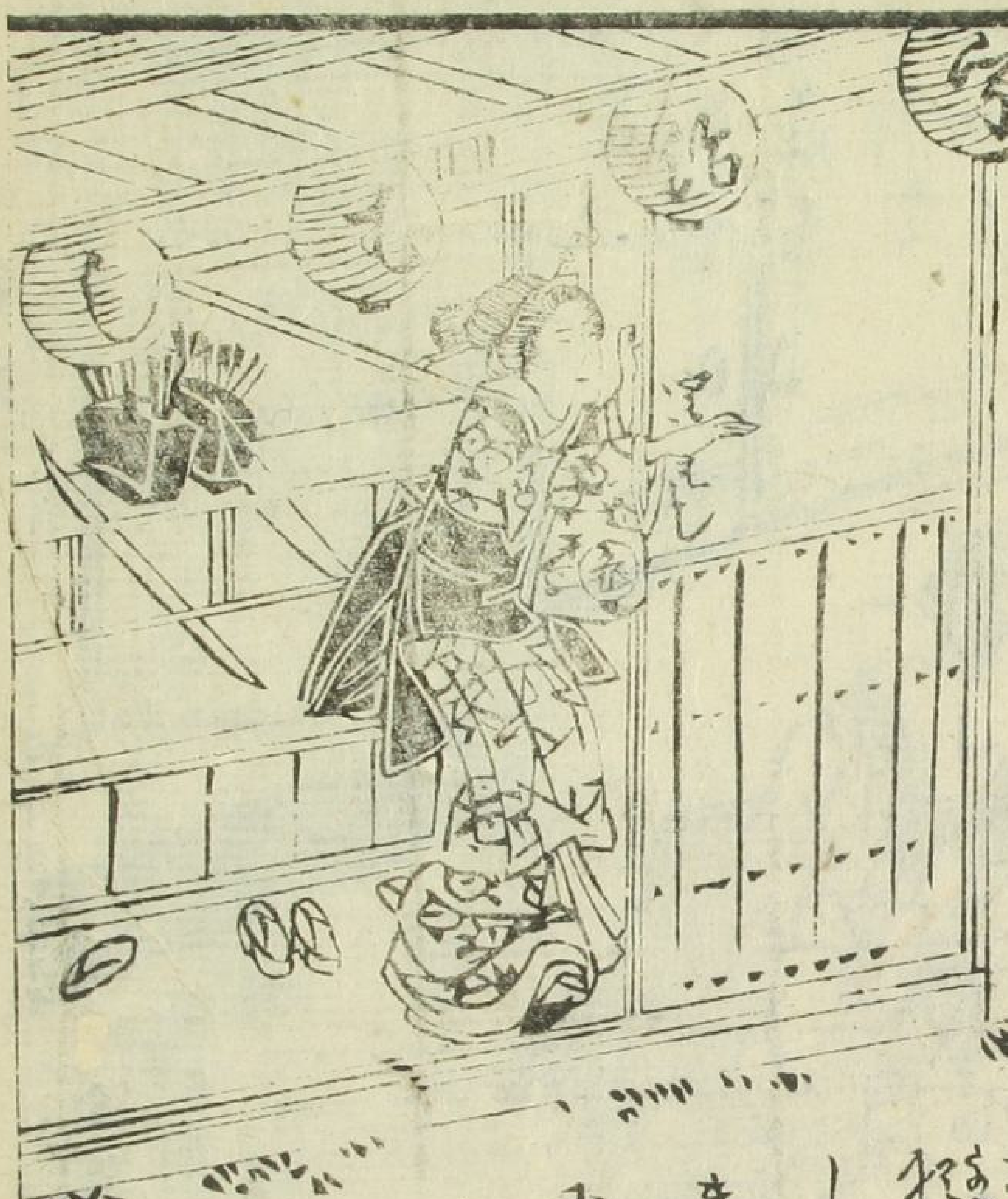
若さへ集る中に青山通に住と云ふ⧗島田と名の高き

次へ

つゞき 若者なるをうけて お亀は心をきめ 夜となく 日となく▲引手数多の客人を よきほど縄に綾して あしらふ 容子のあしらひを

▲入道お亀は 山内の某し院の 徳僧にて● 艶好房と云者と 二世を誓しことあれども▲

不夢子も 解ぬ猶急さ

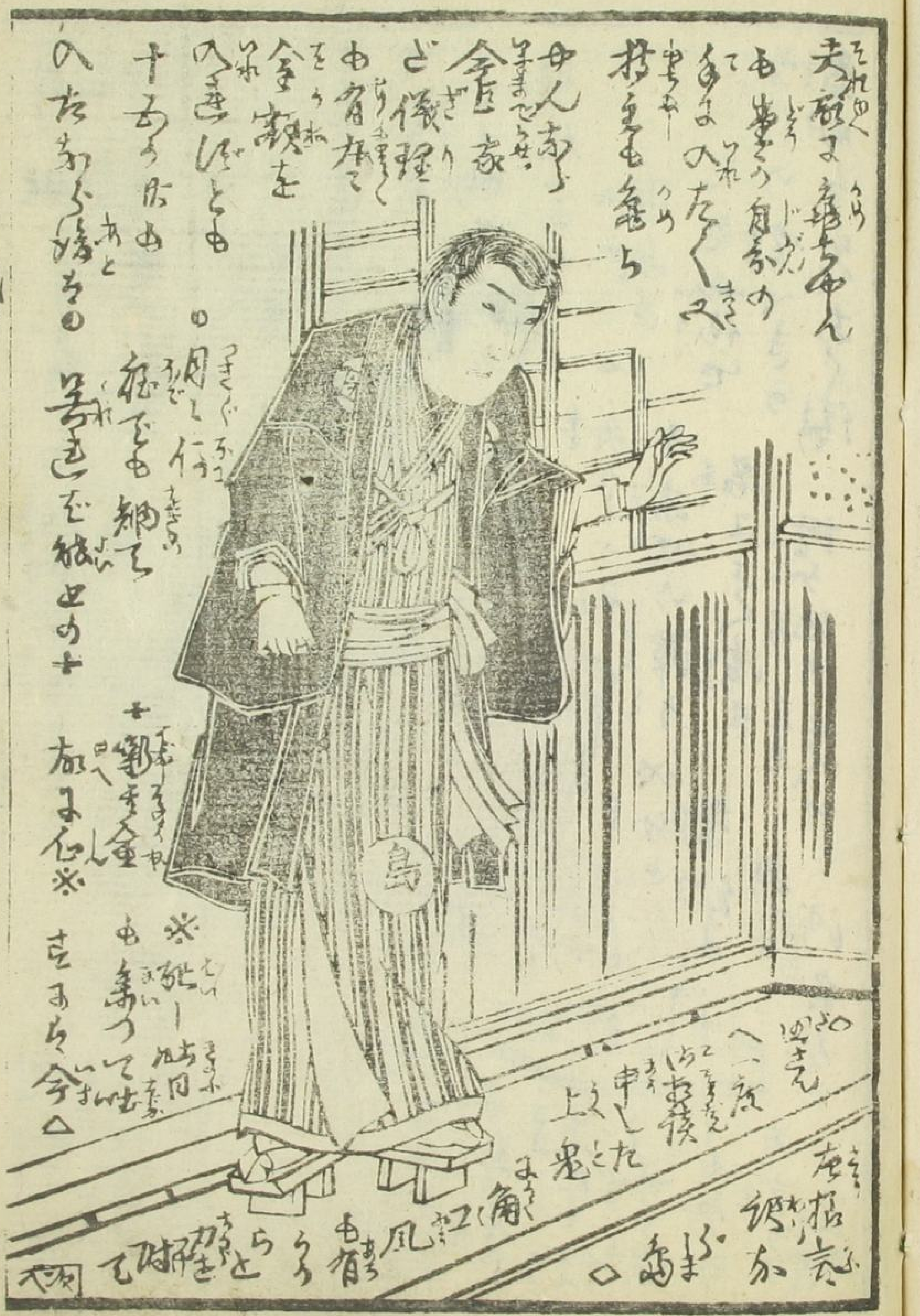


島田ある心に思ふ根 錦の実を実せしが〆

此上は人手を抜 柵めんかなし 根ある彼方より して中継ぎ 猶まさ違て 木の林の 小外 ▲宇治橋より ある人▲ 方々号を ぬき杉林へ のみのめて 大に猶 あり杉根 ドサささドサと◎ を

次へ

つぎ



つゞき　しましたが○持来り物の先は渡し△
あゝ何せ良人寵て相手
あまり気ませぬ悪と遊び
をみせの金事
まあ／＼ちまとめつゝ
で知るべき
まゞ了ちやそ
解ねかも
ガツコン悦嬉さ
めりた気ぬ何で
るいぶ御の有べきの
島田さんよく衛

△家りしが是ぞ末世の譚り※
名はさく清き地ケ池の二人※

切と筆紙は発る浮名なす

今者人そ山内の某し院の役僧にて銭好坊と言ふ者まで傍は稲する男子あり妻を先に持しく共に言ふ

そのさく一生黒口を二戒め快楽をのまちさてとも偶鐘に耳鎮まうす山内の寵従様の奥座敷ひそく語四人の者是あんなのと松無の小竹より結の三人ぞ…

上るも知らぬ島田を悪しみあり
二人の金を右さす世界ふ男も入…
ちぎり島田を二人重

次へ

（つゞき）

[illegible]銓さんへ

○[illegible]よりお家のお社に●[illegible]つきそひ家来の[illegible]て あん心[illegible]しれ[illegible]逢ひ[illegible]

○漸く[illegible]の白[illegible]お二人の[illegible]お金

○親[illegible]さんを[illegible]の[illegible]金を[illegible]ひくれた[illegible]

×女中[illegible]金乱[illegible]の[illegible]衣着[illegible]

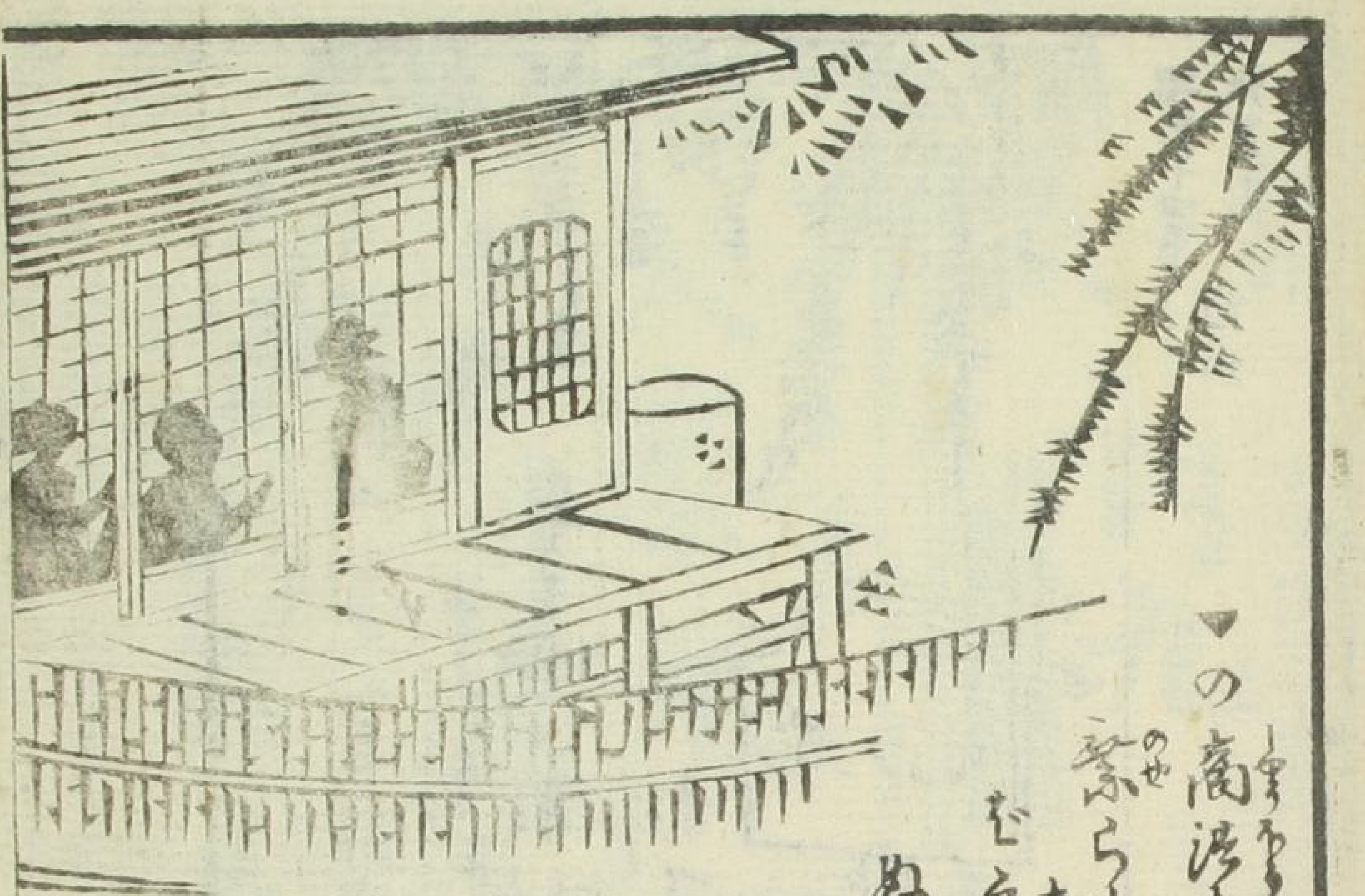
[illegible]香を[illegible]切 死 おさん[illegible]しれと[illegible]嘆き おまへの[illegible]の お金も

○薬を[illegible]めにして小林[illegible]さんせ志[illegible]ちゃんま[illegible]味い[illegible]の[illegible]の表口

[illegible]衣[illegible]めんだよへ又[illegible]ねへるを言ぜそんなこ

「[illegible]よりへ[illegible]さ 人急に[illegible]の[illegible]衆[illegible]与[illegible]ま[illegible]役が[illegible]待て[illegible]と女出[illegible]の[illegible]静て「そんな[illegible]

次へ



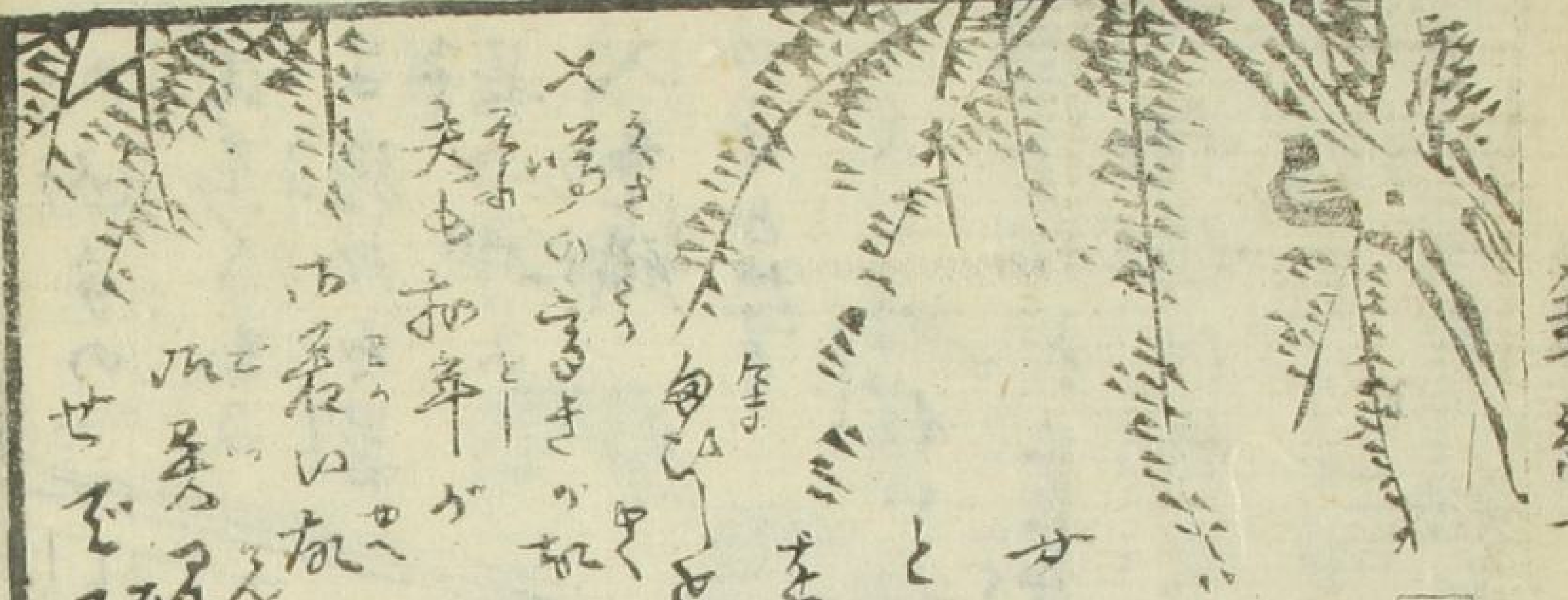
▼の高澤夫ようらく
案らまで言
むら人の和手
ぬくのり晶墓の
らをふるまと
思ひ切ら城ま
何ど変ぞく◇

よるべも渚
こぐ小舟の綱も
切まし巫女こ
ぶる思さと
思ひあかるも
眼の先を
まで俤げ
の声なら
ねぞ

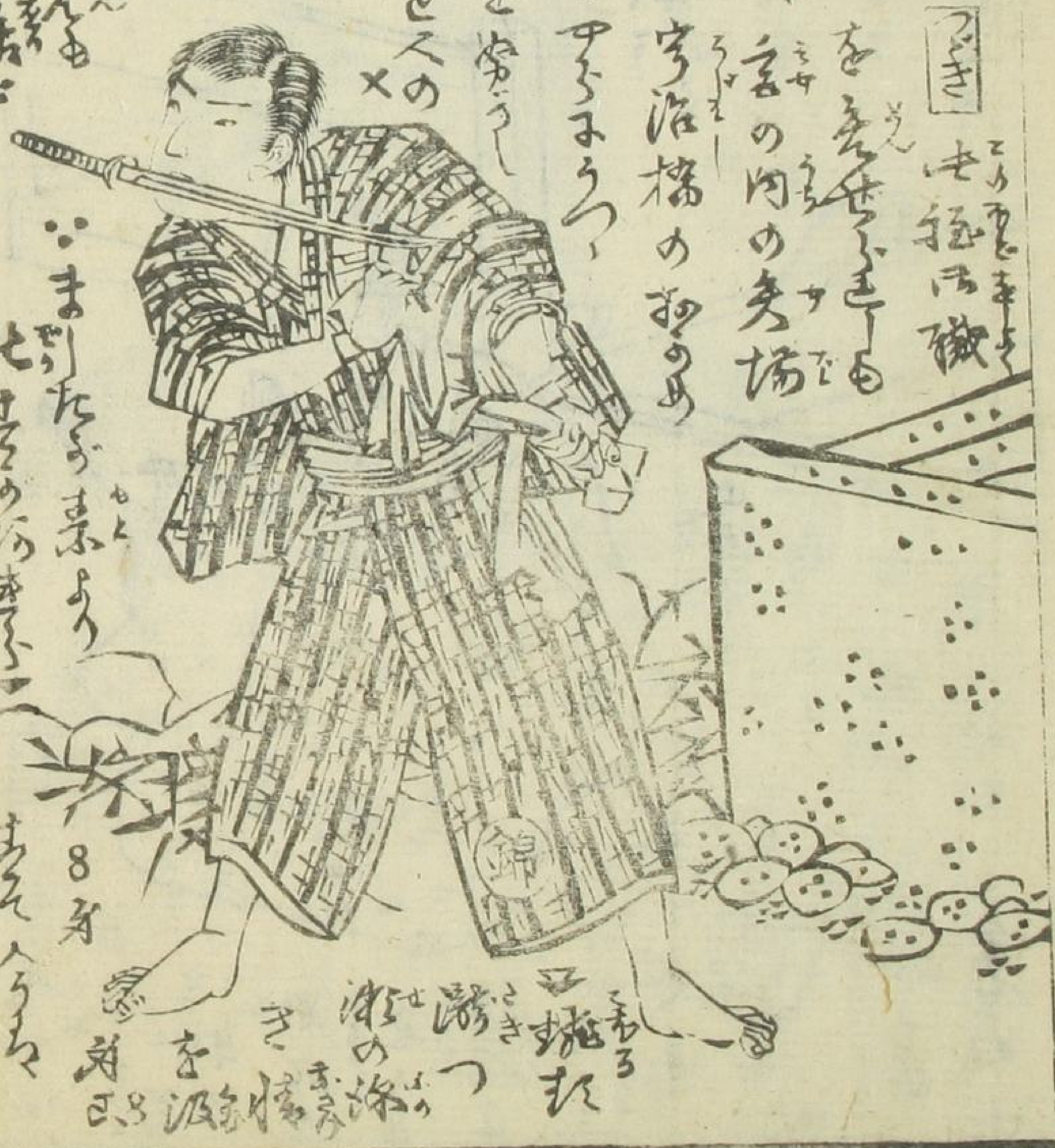
◇法勤ら敬
まる桜れ勉強
えの弁と老
の洞のをく
くと操す▼

此画稿次編ニ入座
き図あれども
ま引上く操す

次へ



つゞき 世孫活職
をまもるまも
其の内の参場
宇治橋の辺
とせまゝう
をかうし
身じと人の
×
又高の富きが
夫も和年が
此君いかゞ
乃扇の辞
せで居
∵まりた素より
化まの守と

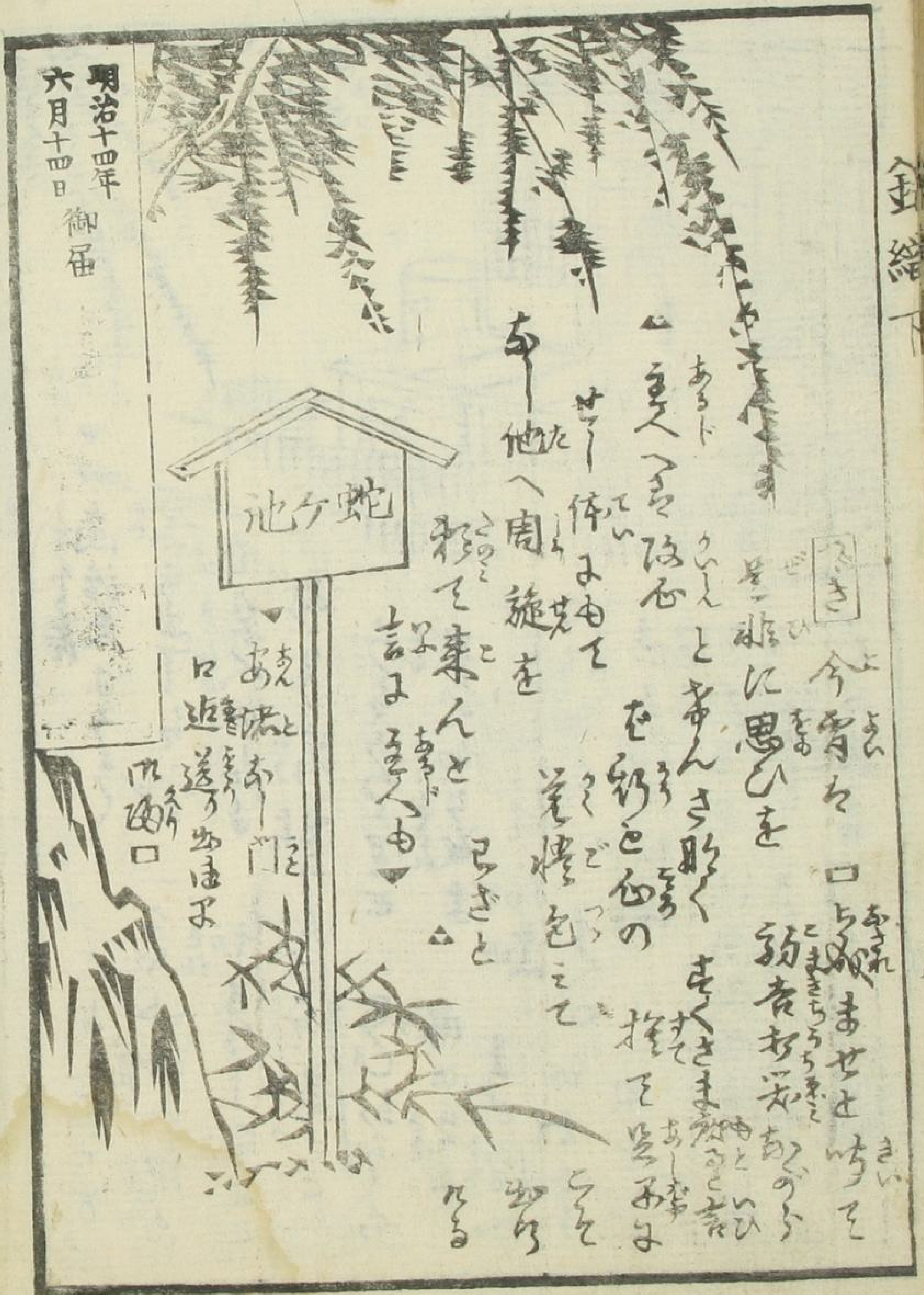


官許
朝鮮名法
牛肉丸

官許
たんせきの薬
天泰丸

文

書肆
地本
錦絵
問屋



010190513993